

## 物語における〈時間〉をめぐって

河田 学

はじめに

物語論(ナラトロジー)という新しい研究領域をひとまず確立したと通常考えられている、ジェラルド・ジュネットの「物語のデイスクール」<sup>①</sup>(一九七二)の大半を占めているのは、じつは物語の〈時間〉にかんする考察である。全五章からなるこの論考の最初の三章〈順序〉〈持続〉〈頻度〉<sup>②</sup>——これらはページ数にしてみれば「物語のデイスクール」全体の半分強を占める——はいずれも時間の問題を扱ったものである。残りの二章ではそれぞれ視点、語り手の問題が考察されているのだが、語り手を論じた第五章の〈物語行為の時間〉と題された一節でも、再度時間の問題がとりあげられることになる。

細かな検討は次章以降で行うことにして、ここでは簡単にジュネットの時間論の全体を俯瞰しておこう。物語のなかで語られる出来事は、それらが物語世界のなかで実際に起こった固有の順序をもっている。しかしその順序は、それらが物語のなかで実際に語られる順序とはかならずしも一致していない。このような、語られる出来事が起こった順序と語られる順序との関係を論じたのが第一章〈順序〉である。一方、語られる出来事が生起するさいには、どれだけの時間を必要とする。しかしこの時間もまた、長い時間をかけて起こった出来事が短く語られる(またはその逆)こともありうるという意味で、その出来事を語るのに消費される時間とはかならずしも一致しない。このような、語られる出来事が起こるのにかかった時間と語られるのにかかった時間との関係を論じたのが第二章〈持続〉である。さらに、物語のなかである出来事が起こった回数と、それが語られる回数も一致するとは限らない。出来事が起こる回数と語られる回数との関係を論じたのが第三章〈頻度〉である。これらに加え第五章〈態〉に含まれる〈物語行為の時間〉<sup>③</sup>では、物語行為が行われている時間と物語内容が生起している時間との関係が論じられている。

本論文では、これらの議論のうち、順序にかんするものおよび物語行為の時間にかんするものをとりあげ、物語における時間の本質を探る。

### 一、ジュネットの時間論——〈順序〉について

本章から第三章では、ジュネットが「物語のデイスクール」第一章で行った物語の順序にかんする議論を再点検し、その問題点を抽出してみたい。

物語において語られる出来事にかんして、それらが物語世界のなかで実際に起こった順序と、それが物語言説のなかで語られる順序とがかならずしも一致しない(むしろ、ほとんどの場合には異同がみられる)ことはよく知られた事実である。英米系の物語論は前者、すなわち時系列にしたがった一連の出来事を(ストーリー) *story* と呼び、後者、すなわちストーリーが実際に語られる順序へと再構成されてできる〈プロット〉 *plot* と区別してきたし、この区別はロシア・フォルマリストたちによる〈ファースト・イブダ〉 *fabula* / 〈シュジェート〉 *syuzhet* の区別とも対応している。ジュネットは、物語世界内の出来事をそれが起こった順序そのままに語らない語りの形式を総称して〈錯時法〉 *anachronie* と呼び、さらにその下位カテゴリーとして、時間的には前のことを物語が後から語る〈後説法〉 *analepse* と、後のことを前もって語る〈先説法〉 *prolepse* とを考えた。

錯時法の具体的な事例としてジュネットが最初に分析するのは、次の『イリアス』の冒頭部分である。

女神よ、ペーレウスの子アキレウスの怒りを歌いたまえ。その忌まわしき怒りこそ、アカイア勢に幾多の困難を与え、誇り高きあまたの英雄たちの魂を冥府の王アイデースの糧として投げやり、他方その亡骸を野犬、天空の鳥どもの餌食としたのである——かくしてゼウスの意志は成就したのである。一つの不和が、民の保護者たるアトレウスの子「アガ멤ノン」と、崇高なるアキレウスとを分け隔てたその日のことから歌いたまえ。神々のうちのいったい誰が、二人をそのような不和、諍いに追い込んだのか? それはレートーとゼウスの子「アポローン」であった。ほかならぬこの神こそが、かの王「アガ멤ノン」に憤り、「アカイア勢の」大群のなかに酷い悪疫を流行らしめ、多くの兵士を瀕死の状態へと追いやったのである。そしてそれは、アトレウスの子が、彼の神官クリューセースを侮辱したからであった。<sup>④</sup>

ジュネットによれば、この一節で語られている出来事（ジュネットは〈物語対象 object narratif と呼ぶ〉）は、[A] アキレウスの憤り、[B] アカイア勢の苦難、[C] アキレウスとアガ멤ノーンの不和、[D] アポローンによる疫病の流行、[E] アガ멤ノーンのクリューセースに対する侮辱の五つであり、これらを実際に起こった順序に並べると、E ↓ D ↓ C ↓ A ↓ B となる。すなわち、A ↓ E の各断片が時間軸上で占める順番を数字で表せば、それぞれ 4、5、3、2、1 であり、これをジュネットは A4 ↓ B5 ↓ C3 ↓ D2 ↓ E1 と表記する。

続いてジュネットが、彼自身の言葉を借りれば「錯時法のより詳細な分析」<sup>⑥</sup>の対象としたのは、プルースト『ジャン・サントウイユ』からの一節であった。ジュネットはこの一節を次のように A ↓ I の九つの断片に切り分けて分析するのだが、各断片の物語言説上での順序がわかるようまず仏語を引用し、その各断片に対して日本語訳を付すことにする。

[A] Quelquefois en passant devant l'hôtel il se rappelait [B] les jour de pluie où il emmenait jusque-là sa bonne, en pèlerinage. [C] Mais il se les rappelait sans [D] la mélancolie qu'il pensait alors [E] devoir goûter un jour dans le sentiment de ne plus l'aimer. [F] Car cette mélancolie, ce qui la projetait ainsi d'avance [G] sur son indifférence à venir, [H] c'était son amour. [I] Et cet amour n'était plus.

[A] 時折そのホテルの前を通ると彼は [B] を思いだしたものだ。巡礼のように女中をそこに連れ出した雨の日々  
[C] しかし思い出すとはいっても [D] はなかった。  
[E] 当時彼が、[E] と考えていた憂鬱  
[F] もはや彼女を愛していないという感情のうちに味わうであろう  
[G] というのも、その憂鬱を [G] のうへへと前もって投げかけていたものは、来たるべき彼の無関心  
[H] 彼の愛にはかならなかったのだから。  
[I] そしてその愛は、もはやなくなっていたのである。<sup>⑥</sup>

この一節は、『ジャン・サントウイユ』の主人公であるジャンが、かつて自

分の愛したマリー・コシシエフが住んでいたホテルを数年のうちに再発見する場面である。ここでは二つの異なる時点——すなわちこの「再発見」の時点（現在<sup>⑦</sup>）と、かつてマリーを愛していた時点（過去）——での出来事とが描かれているが、これら二つの時点を時間の順序にしたがい、それぞれ 2、1 と表すならば、この一節の時間的構造は、A2 ↓ B1 ↓ C2 ↓ D1 ↓ E2 ↓ F1 ↓ G2 ↓ H1 ↓ I2 と分析される。

ジュネットはさらに各断片の従属関係へと分析を進める。ジュネットによれば断片 B は、断片 A において一人の登場人物が行っている回想の内容、すなわち断片 A が指示する現在の時点でのその登場人物の思考内容であるという意味で、時間的に断片 A に従属している。同様に、断片 C では語り手が過去を回想しているが、その内容である過去に坎する記述 D、F、H は、断片 C に従属している。一方、断片 E は現在に属する事柄を述べてはいるが、断片 D における主人公による過去の時点での未来の予想の内容だという意味で、断片 D に従属している。同様に、断片 G は断片 F に従属している。これらの従属関係をまとめたのが、次の図式である。

A2 [B1] C2 [D1 (E2) F1 (G2) H1] I2

さらにジュネットは、錯時法が見られる物語断片と、それが派生したものと物語断片との間の時間的な従属関係をもとに、この派生元の物語言説を〈第一次物語言説〉*récit premier* と呼ぶ。上記の『ジャン・サントウイユ』の例でいえば、A ↓ C ↓ I が第一次言説であり、B は A に、D、F、H は C に従属する第二次の物語言説であり、E、G はそれぞれ D、F に従属する第三次の物語言説ということになる。このように、錯時法が現れるさいには、ある語りの時点で第一次の（あるいはより低次の）物語言説が中断されて、第二次の（あるいは一つ高次の）物語言説がべつの時点からの物語を語り始める

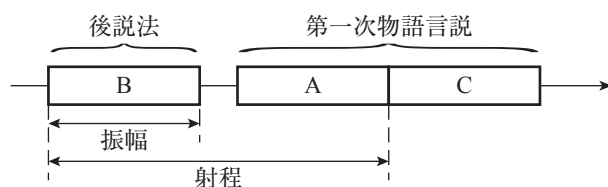


図1 錯時法と振幅・射程

が、ジュネットはこのさいの時間的な移動距離を、この錯時法の〈射程〉  
portéeと呼び、また錯時法が持続する物語上の時間を、この錯時法の〈振幅〉  
amplitudeと呼んだ。図1では、物語言説はA→B→C→……の順で進むのだ  
が、A、Cが第一次物語言説であり、BはAに対する錯時法となっている。A  
が中断される物語上の時点とBが始まる時点との距離が錯時法Bの射程であ  
り、Bが語る物語上の期間が錯時法Bの振幅である。

ここまで確認したうえで、次節ではジュネットの理論の問題点を検討しよ  
う。

## 二、ジュネットの時間論二——分析のレヴェル

物語における時間を順序、持続、頻度の三項から考えるジュネットの理論的  
枠組みは多くの論者によって継承されている。順序の問題に限ってみても、前  
章で紹介した概念・用語は、物語における時間的順序の実体を記述するのに必  
要かつ十分であるように思われるし、(本稿ではとりあげないが) 実際それらの道  
具を使ってジュネットが『失われた時を求めて』——「物語のディスクール」  
は物語論の古典であると同時に、すぐれたブルースト論でもある——に對し  
て行った分析は、まさに時間そのものをテーマにしたこの一大小説作品の本質  
を剔出している。しかし本稿のねらいは、ジュネットの時間論を作品論へと応  
用することではなく、むしろ、その時間論自体を詳細に検討することによつ  
て、そこから物語における時間の本質に坎する洞察を導出することにある。  
本章ではこの立場から、ジュネットの議論をさらに細かく点検してみよう。

まずは、前節で紹介したジュネットによる二つの分析——『イーリアス』  
冒頭部分の分析(以下、分析Iとする)、そして『ジャン・サントウイユ』の一節  
の分析(分析IIとする)——を比較してみよう。仏語原文ではIが百二十八語、  
IIが六十四語と、ともに比較的短いテキストを分析したものである。しかし、  
そこで分析される「断片」の数は、Iでは五、IIでは九と、もとのテキストの  
長短と逆転している。その意味で、IIはまさにジュネットのいうとおり「より  
詳細な分析」なのである。しかし分析I、IIの違いは、そのいわば解像度の違  
いだけではない。Iで分析の対象とされたA→Eの断片は、該当部分で語られ  
た物語内容の断片であるのに対して、IIにおけるA→Iの断片は、物語言説そ  
れ自体の断片なのである。いいかえれば、分析IIは物語言説自体をそのまま分

節化し分析しているのに対して、Iの分析過程には、物語言説から物語内容を  
抽出するという、いわば〈要約〉の作業が介在しているともいえる。もともと  
I、IIの間だけで考えるならば、仮にIの『イーリアス』からの一節にIIと同  
じようなより精密な分析を加えたとしてもおそらくその結果は変わらないであ  
ろうから、このような分析手法の相違それ自体には何ら問題はない。しかし、  
これらの分析(とそれに続く『ソドムとゴモラ』からの一節の分析)を踏まえ、さら  
に大規模な分析を始めるにあたって、ジュネット自身が、

いうまでもないが、このようなレヴェルでの分析(この箇所では『失われた時  
を求めて』の第一部にあたる「スワン家のほうへ」のほぼ全体が分析されている)で  
は、違った縮尺であれば問題になるような細部を考慮することはできない  
し、それゆえ分析はできるかぎりの単純化を行うことになる。<sup>(8)</sup>

と断っているように、よりマクロな分析を行おうとしたならば、分析IIにおい  
てジュネットがしたように、テキスト上の断片を逐一拾いあげながら、そこに  
みられる時間構造を分析することは断念せざるをえないのである。実際、この  
一節に続くジュネットの分析ではプレイヤード版にして四百ページを超える  
『スワン家のほうへ』が、全部で十の断片に分割されているが、このことは、  
各々の断片をよりミクロなレヴェルでみたさいに錯辞法的な構造がみいだされ  
ないということをかみならずしも保証しない。ジュネットが一つ前の分析で念を  
押しているように<sup>(9)</sup>、断片の切り分け方はつねに恣意的なのである。しかしこ  
れは、ジュネットの分析の問題点ないしは限界を示しているのではなく、むしろ  
物語言説の特性を明らかにしている。すなわち、マクロなレヴェルにおいて  
錯時法的構造を呈する物語言説をさらに細かく分析すると、ちょうど部分が全  
体を反復するフラクタルのように、そこにふたたびより細密な錯時法的構造が  
姿を現すのである。このような、マクロな錯辞法的構造(たとえば上述の『スワ  
ン家のほうへ』の構造)のなかに、さらにミクロな錯辞法的な構造(たとえば分析  
IIのように、一文の内部にまで錯時法がみいだされる構造)が入れ子になっている状態  
こそが、ジュネットの分析が明らかにする、物語における時間の第一の姿なのである。



## 三、ジュネットの時間論三——その問題点

分析Ⅱをさらに詳しくみてみよう。たとえば最初のセンテンスに含まれる断片Aに対してBは錯時法（後説法）を構成している。

〔A〕時折そのホテルの前を通ると彼は〔B〕巡礼のように女中をそこに連れ出した雨の日々」を思いだしたものだ。った。

これに続く一文

〔C〕しかし思い出すとはいっても〔D〕当時彼が、〔E〕もはや彼女を愛していないという感情のうちに味わうであろう」と考えていた憂鬱」はなかった。

に含まれるDもまたCに対して後説法を構成しているが、ジュネットは、これから二つの後説法の間に差異をみいだす。ジュネットは、A—Bの後説法を次のように説明する。

断片Aを物語の出発点であり、ゆえに自律した地点であると考えらるならば、断片Bは明らかに回想的なものとして規定される。この回想は、それを引き受けているのが登場人物自身であるという意味で主観的 (subjective) であり、物語はその登場人物の現在の思考を語っているにすぎない（彼は思いだしたものだ……）（「と語り手がいつているように」）。それゆえ、Bは時間的にAに従属している。すなわち、BはAとの関連において、回想的であると規定されるのである。<sup>(10)</sup>

ここでは二つのことがらが問題とされている。まず第一に、断片Bの後説法は回想的でありかつ主観的であるということ。そして第二に、その回想の内容は過去（彼）がマリー・コシエフを愛していたころに、かんするものだが、断片Aが指示する時点、すなわち現在（彼）がホテルを見いだしたころの回想の内容であり、その意味で断片Bは断片Aに時間的に従属している、ということである。

一方、CとDについては、次のように述べる。

Cは従属関係なしに最初の地点への回帰を行っている。Dは新たな回想を行うが、今度の回想は物語言説によって直接的に引き受けられた回想である。すなわち、たとえ主人公もそれに気がついていても、憂鬱の不在について語っているのは明らかに語り手なのである。<sup>(11)</sup>

ここでも二つのことがらが主張されている。一つは、AからBにかけての時間の進行には従属関係が認められるが、BからCにかけての時間の進行には従属関係は存在しないということ、そしてもう一つは、A—Bにおける回想は、登場人物自身がこの回想を行っているという意味で「主観的」であったのに対して、C—Dにおいて物語言説が直接引き受ける回想は「客観的」(objective) だということである。<sup>(12)</sup>

回想には主観的回想と客観的回想があり、その回想の内容（B、D）は、前者においては回想の主体となる登場人物が回想を行っている時点（A）に、後者においては語り手の現在（C）に帰属するがゆえに、回想内容を表す断片（B、D）はそれぞれ回想の起点となる（A、C）に時間的に従属している、これがジュネットの議論である。一見明快にみえる議論だが、これらについては次のような問題点を指摘しておかなくてはならない。

## ①主観的回想／客観的回想という区分について

この区分については、いくつかの疑問点をたちどころに挙げる事ができる。ジュネットによれば、登場人物が回想を引き受けている（ゆえにその回想の内容は語り手に帰属する）のが客観的回想である。ジュネットがこれらの用語を使用した文脈、すなわち分析Ⅱにおいては、これらの対比は、ある物語断片が回想であること、あるいはその主体を示す語句（「彼は思いだしたものだ……」(Je me rappelle...)）の有無が、両者の対比を際立たせているが、他の事例を考えると両者の違いはそれほど明確ではない。もともと素朴に考えても、いわゆる一人称の語り手が回想を引き受けている場合はどうだろうか。一人称の語り手は登場人物でもあるから、一人称の語り手が行う回想は主

観的回想であるようにも思われるが、はたしてほんとうにそうだろうか。たとえばバルザック「グランド・ブルテ・シュ奇譚」(一八三三)<sup>(13)</sup>は、ヴァンドームの町に滞在している語り手の〈わたし〉が、グランド・ブルテ・シュ館と呼ばれる廃墟めいた建物の秘密を解き明かす物語だが、実際に館に坎する情報を〈わたし〉に与えるのは、館の持主であった故メレ伯爵夫人の遺言執行人であるルニョーと、〈わたし〉が滞在している宿の女将、そして、かつては館の小間使いで今では女将の元で働いているロザリーの三人である。このうち、ルニョー、女将が〈わたし〉に語って聞かせる話は、どちらも〈わたし〉とのダイアログの形で、おおむねのところ直接話法で書かれているのに対して、ロザリーの話は、彼女が「長々としゃべり立てたものだから、これを忠実に再現するとなると一冊の本まるごとでも収まりそうにない」<sup>(14)</sup>ため、〈わたし〉はその要約のみを語るのである。〈わたし〉の要約によるロザリーの語った物語は邦訳で一〇頁以上にわたって続くのだが、当然ながらこの部分は、〈わたし〉のヴァンドーム滞在中の出来事を語る第一次物語言説に対して後説法をなしている。この部分で語られていることがらが〈わたし〉という一人の登場人物の要約の内容であるという意味では、これは主観的回想であるようにも思われるが、実際の物語言説は限りなく三人称の語りに近い<sup>(15)</sup>ため、これを主観的回想と考えることにはおおいに疑問が残る。一言でいえば、この一節は主観的回想であるのか、客観的回想であるのか、判別不可能なのである。

## ②時間の従属性について

ジュネット自身はこの従属関係を時間的なものと述べている。すなわち、分析ⅡAーBにおいて、Bが記述する回想の内容が、語りの時点Aでの、つまり文法的に言えば、Aの「彼は思っていた……」(it se représentait…)という半過去形が指し示す過去の一時点での登場人物の思考内容であるからこそ、BはAに時間的に従属しているのである。しかし断片CーDにみられる従属関係では事情がいくぶん異なる。断片Dの内容はたしかに語り手によって想起された過去の内容であるが、BがAの時点での〈彼〉の思考内容であったように、DがCの時点での語り手の思考内容であったとはいえない。なぜならば断片C自体が半過去形で語られている以上、語り手はCが指示する時点よりも時間的に先の地点(すなわち、語り手にとっての現在)から語っているのであり、語

り手の思考内容としてのDはこの時点に属するはずだからである。すなわちより一般的に言えば、語り手が回想を行うさい、その回想の内容は、語りの時点(第一次物語言説が今まさに語っている物語世界の時間軸上の一時点)ではなく、語り手自身が物語行為を行っている時点に帰属するのではないのか。

これら二つの問題点は、ジュネットの議論が、物語言説における「回想」の実態について、さらなる洗練を必要としていることを示すものではあるが、それでもなおジュネットの時間論を過小評価することはできない。少なくとも①にかんして言えば、主観的／客観的回想という対立が従属性の前提条件となっているにもかかわらず、その対立がジュネットのテクストのなかでそれほど強調されていないことからわかるように、ジュネットにとっては、両者の差異よりもむしろ類似性のほうが意味があったのではないかと考えられる。すでにみたように、ジュネット的な意味で物語断片が「回想的」(récapitulatif)であるためには、回想であることを示すマーカー「……を思いだす」が必要ではないばかりか、われわれが日常会話でも口にしようとするような、

私は昨日買つておいたケーキにろうそくを立てた。

といった言説も、回想的な錯時法(すなわち後説法)を構成しようのである。すなわち、登場人物による主観的な回想であれ、物語言説それ自体(あるいは語り手)による客観的な回想であれ、また、「……を思いだした」のような文字どおりの意味での回想であることを示すマーカーがあるものであれ、そうでないものであれ、いずれも物語の時間を操作するという機能を担っているという意味においては対等なのである。

主観的／客観的回想という区分が瓦解すると、従属性の判定の根拠も危うくなるが、そもそもジュネット自身が従属性の恣意性、相対性を認めているように思われる節もみうけられる。すでに引用した箇所だが、分析Ⅱに先だってジュネットは、「断片Aを物語の出発点であり、ゆえに自律した地点であると考えらるならば」(傍点は筆者)と留保をつけている。逆にいえばすべての物語断片は、それ自体を取り出してみれば物語の出発点、すなわち第一次物語言説とみなしうるということである。

これらをあわせて考えると、物語における時間の第二のありようとして、次のようにいうことができるかもしれない。すなわち、ここではジュネットの「retrospectif」という用語を便宜上「回想的」と訳したが、ジュネットの「回想」とは本来の意味での回想——ある回想の主体がある一定の時点から過去を想起するという行為——に限定されないものであり、物語は自由に過去と現在とを往き来することができるのである。主観的／客観的回想という区分の曖昧性は、むしろ物語が過去を導入するその方法の多様性を示していると考えるべきではないか。先にみた「グランド・ブルテッシュ奇譚」の例が境界的な事例であるのは、この回想が語り手（わたし）によるものであるにもかかわらず、その回想自体がいつ行われているのか、その回想行為の時点が物語世界内の時間軸上に位置づけられないからである。回想におけるこのような事例の存在は、個別化された一人称の語り手と非人格の三人称の語り手を両極として、語り手の存在感にグラデーションがみられることと酷似している<sup>16)</sup>。

もうおわかりのように、このことは②で指摘した問題——客観的回想の回想内容はいつの時点に帰属するのかという問題——とも直結している。この問題を考えるためには、ジュネットによる時間にかんするもう一つの議論——物語行為の時間にかんする議論——を参照しなくてはならない。

#### 四、物語行為の時間論——語り手はいつ語るのか？

本章では、前章までの議論を踏まえ、ジュネットの錯時法論と語り手の時間的位置の問題にかんする議論との接続を試みる。まずはジュネットの議論を概観しよう。

ジュネットは「物語のディスコース」の第五章、語り手の問題を扱った〈態〉のなかで「物語行為の時間」と題した一節を割いて、語り手が自身の物語内容に対してとる時間的位置について論じている。ジュネットによれば語り手の位置には、①後置的 (ulérieur)、②前置的 (antérieur)、③同時的 (simultané)、④挿入的 (intercale) の四とおりがありうる<sup>17)</sup>。①の後置的なタイプはもともと典型的な語りの位置で、過去形の使用によって特徴づけられるが、物語行為が行われている時点と物語内容の時点との時間的距離はかならずしも明確ではない。②の前置的なタイプは物語内容が予言的に語られる形式だが、ジュネットが挙げる例が、十七世紀のパロック詩人サン・タマンの『救われしモーゼ』

(二六五三) にみられる予知的な夢の記述であることからわかるように、物語内容のすべてが前置的な位置から語られることは(原理的には可能であったとしても) 実際には考えにくい。③の同時的なタイプは、物語内容が生起する時点と物語行為が行われる時点とが一致しているようなタイプで、その結果として物語は現在形によって語られる。ジュネットは、ロブ・グリエをはじめとするヌーヴォー・ロマンの作家たちや、デュジャルダン、ベケットなどの作品をその例として挙げている。④の挿入的なタイプは、物語が進行するにつれ、物語行為の時点も移動していくものである。もともと典型的な例は書簡体小説や日記形式で書かれる小説であるが、ジュネットも例として挙げているように、カミュ『異邦人』(一九四二)もこのタイプの物語言説の事例である。これら四つの語りのありかたを図式化するとすれば、図2のようになるだろう。

①の後置的な語りとはもともと典型的な語りのタイプではあるが、ジュネットも指摘しているように、このタイプに属する物語の大部分においては、語り手が物語行為を行っている時点が実際に特定されることはめったにない。それで

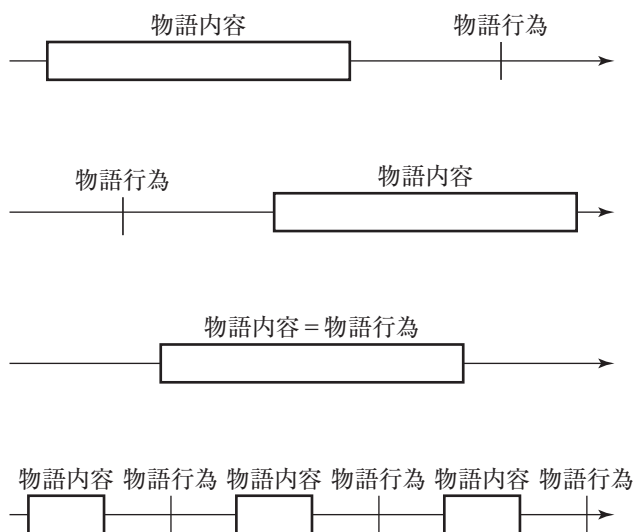


図2 物語行為の時間の四類型：上から順に①後置的、②前置的、③同時的、④挿入的



もなおそれらを後置的な語りとみなしうる根拠として、ジュネットはそれらが過去形によって語られていることを挙げている<sup>(8)</sup>。たしかに時制を参照すれば、①を未来形で語られる②や現在形で語られる③と区別することは容易だが、④の挿入的な語りもまた、ほとんどの場合は過去形によって語られる。それでもなお、ある具体的なテキスト（たとえば『異邦人』）が④に正しく分類されるのは、そのテキストが④がみたすべき条件、すなわち語られる物語内容の断片の間に物語行為が位置していることを明確に示す指標を含んでいるからである（『異邦人』では、物語の進行にともないほぼ直線的に時間が経過するが、各章に「きょう」といった物語行為の時点と物語内容の時点との位置関係を明示する時間標識が含まれている）。逆にいえば、過去形によって語られる物語のうち、物語行為の時点が明示されておりかつそれが物語内容の間に挿入的に配置されているものが④に分類されるのであり、明示された物語行為の時点が物語内容に対して後置されているもの、および物語行為の時点が明示されていないものが①に分類されているのである。以下では、①と③の関係をさらに考えるために、両者の境界例ともいえるようなテキストを具体的にみてみよう。

次の一節は『坊っちゃん』（二九〇六）第一章の一節である。

母が死んでから清は愈おれを可愛がった。時々是小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廢せばいいのにと思った。  
 「……」是はずつと後の事であるが金を三円許り借してくれた事さへある。  
 「……」此三円は何に使ったか忘れて仕舞った。今に帰すよと云ったがり、帰さない。今となつては十倍にして帰してやりたくても帰せない。<sup>(9)</sup>

『坊っちゃん』の第一章では、語り手である〈おれ〉が、自分の小学校時代から語り起こし、母、そして父の死を経て、東京の物理学校を卒業し「四国辺のある中学校」に赴任するために清に見送られて汽車に乗るまでを語っている。ここに引用した一節は、借りた三円を「今となつては……帰せない」という一文で、〈おれ〉の物語行為自体が、清の死後に行われていることを示している箇所である。一方、『坊っちゃん』の最終章、第一章は次のように幕を閉じる。

其夜おれと山嵐は此不浄な地を離れた。船が岸を去れば去る程いゝ心持ちがした。神戸から東京迄は直行で新橋へ着いた時は、漸く娑婆へ出た様な気がした。山嵐とはすぐ分れたがり今日まで逢ふ機会がない。

清の事を話すのを忘れて居た。——おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げた儘、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙をばた／＼と落した。おれも余り嬉しかつたからもう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

其後ある人の周旋で街鉄の技手になつた。月給は二十五円で、屋賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊っちゃんのお寺へ来るのを楽しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。<sup>(10)</sup>

〈おれ〉の小学校時代にまで遡り、それ以降はほぼ時系列に従い語られてきた物語は、ようやくこの一節において物語行為の時点に追いつくのである<sup>(11)</sup>。『坊っちゃん』においては、最後に語られている清の死からどれだけの時間が経った時点で〈おれ〉による物語行為が行われているかは明確ではないものの<sup>(12)</sup>、最後の文が現在形で語られている、またこの部分に「今日まで」「今年の二月」といった現在あるいは現在に近い時間を指示する表現が用いられている効果もあり、物語が最後に到つて語り手の現在に合流したことが明らかにするのである。この作品は、よく知られた冒頭の一文（「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」<sup>(13)</sup>）もじつは現在形で書かれているのだが、これも文字どおりの意味で語り手の現在を指示しているものであったのだと、この時点で初めて了解されるのである。物語の冒頭と結末とが現在形で書かれているという事実は、一言でいえば、語り手〈おれ〉が自身の現在に言及することによって物語を始め、小学校時代にまで遡り、東京に戻ってきた〈現在〉までの話を語る、という『坊っちゃん』の円環的な時間構造の縮図ともいえる。

『坊っちゃん』を、同じく語りの時点は特定されてはいるが、一見したところ③の同時的な語り分類されるであろうべつの事例と比較してみよう。レイ

モンド・カーヴァーの短篇「ぼくが電話をかけている場所」(一九八二)は、次のような一節で始まる。

僕とJPはフランク・マーティンアルコール中毒療養所のフロント・ポーチにいる。<sup>(24)</sup>

じつはこの短篇は、この冒頭部分だけでなくすべての第一次物語言説が現在形で書かれており、この第一次物語言説ではある年の十二月三十日から年越しをはさんでの約三日間のことが描かれている。引用文で言及されている「JP」とはジョー・ペニーという人物のことで、語り手の〈僕〉とJPは、ともに二日前の十二月二十八日にここに入所したのである(〈僕〉にとっては二度目の入所である)。作中では、二人のいる療養所の情景に挿入されるようにして、〈僕〉とJPの過去が後説法により語られている。

『坊っちゃん』と「ぼくが電話をかけている場所」(以下「場所」と略記する)とを比較しながら、まずはジュネットによる物語行為の時間的位置にかんする分類について考えてみよう。すでにみたようにジュネットは、物語言説における過去形の使用をタイプ①の十分条件とみなしている。であるとすれば、たとえ冒頭の一文(「親譲りの無鉄砲で……損ばかりして、居る」)と結びの一文(「だから清の墓は小日向の養源寺にある」)が現在形で書かれていたとしても、『坊っちゃん』はタイプ①に分類されるだろう。事実ジュネットの議論では、冒頭で現在形が用いられる『トム・ジョウンズ』(一七四九)、『ゴリオ爺さん』(一八三五)や、結末部分で現在形が用いられる『ウジェーヌ・グラnde』(一八三三)、『ボヴァリー夫人』(一八五七)がタイプ①について論じるなかで言及されていることを考えれば、『坊っちゃん』もまたタイプ①に属すると考えるべきである。一方、第一次物語言説がすべて現在形で語られている「場所」は、直観的にはタイプ③に分類されるように思われるが、これには多少の留保が必要である。すでにみたように「場所」では、フランク・マーティンの療養所における語り手の〈今〉を語った第一次物語言説は現在形で語られているが、語り手自身あるいはJPの過去は(文法的にはあたりまえながら)過去形が用いられている。したがって、これをあえて看過して「場所」を③に分類するとすれば、ジュネットがいう①の十分条件である「過去形の使用」を、「第一次物語言説における過

去形の使用」と限定して解釈しなくてはならないだろう。実際のところ、ジュネットはタイプ③の例として、『覗くひと』をのぞくロブ・グリエの初期作品を挙げているのだが、そのほとんどが現在形によって語られるたとえば『嫉妬』(一九五七)のような作品においても、ごく一部であるにせよ過去形が使用されていることを考えると<sup>(25)</sup>、先の①の十分条件はこのように限定的に考えるのが妥当であろう。しかしこのように考えると、タイプ①と③との距離はそう遠くはないようにも思われる。おもに過去形で語られる『坊っちゃん』も、もしも冒頭の一文を第一次物語言説とみなし、それに続く語り手の子供時代から四国時代、東京への帰還に到るまでの物語を第二次物語言説と考えるならば、「場所」と同じくタイプ③に分類される可能性を潜在的にもっているのである。『坊っちゃん』と「場所」が違うカテゴリーに属しているようにわれわれに思わせているのは、語り手の現在への言及の多寡、現在形で語られる部分と過去形で語られる部分とのテーマ論的な比重の違いではない。語り手(おれ)の現在が断片的にしか言及されない『坊っちゃん』においては、語り手の過去(四国時代)の物語が中心のテーマであることは明らかなのに対して、「僕」の現在の療養所での状況が随時参照されている「場所」は、現在の物語が主、過去の物語は従、という印象を与えるかもしれない。しかし、「場所」における現在の描写は、妻との不和を経てガールフレンドのところに転がりこむも、二度目の療養所生活を経験することになる語り手の、過去から未来(物語は、語り手が妻とガールフレンドに電話をかけることを決意する場面で幕を閉じる)へと連なる時間のなかのある三日間をスナップショット的に切り取ったものであり、過去への言及なしには物語自体が成立しないことは明らかである。さらにいえば、逆に、過去に属するエピソードが、現在ないしは未来へつながるものとして認識されることによってより大きな意味をもつという点でも、「場所」における時間のあり方は『坊っちゃん』のそれと酷似しているのである。これは、両者において物語行為の時点が現在形により特定、指示されることにより、語り手の〈現在〉と〈過去〉とが対比されている、というふうにもいえることができるだろう。

しかしこの考察には、少なくとも現時点で次の二点をつけ加えておかななくてはならない。第一点目は、現在形の使用がつねにこのような効果をもたらすのか、という問題にかんするものである。この問題については、両者を本稿でも



すでに触れたジュネット自身が現在形の使用の例として挙げているテキストと比較すれば容易に明らかになるだろう。ジュネットが挙げている例をそのまま引用しよう。

イギリスの西のほう、サマセットシアと呼ばれる地方に、最近まで、いや、今でも、そうかもしれないが、オールワージという名の紳士が住んでいた。  
〔トム・ジョウンズ〕

ヴォケー夫人、旧姓ド・コンフラン、は四〇年前からバリで下宿屋を営んでいる老婦人である。〔ゴリオ爺さん〕

彼女の顔つきはといえば、色白で、元氣そうで、穏やかである。その声色はやさしく内省的である。そしてその物腰には飾るところがない。〔ウジェニー・グランデ〕

〔オマー氏は〕猛烈に顧客を増やしている。当局も彼に一目置いて、世論も彼を擁護している。彼は最近勲章をもらったところだ。〔ボヴァリー夫人〕<sup>(26)</sup>

これら四つの例を並べてみると、これらの例における現在形の使用が、語り手と読者とが共有する〈現在〉に言及することによって（もともとこれも、当然ながらフィクション的な仕掛けの一部である）、作品世界が読者の現実世界と地続きであることを示唆し、物語に〈もつともらしさ〉を与えることをねらったものであることは明らかだろう。まさにその点において、これら四作品における現在形の使用は、『坊っちゃん』『場所』におけるそれとは異なっているのだが、その理由もまた明らかである。これら四作品はいずれも、ジュネットの言葉でいう異質物語世界的な語り手<sup>(27)</sup>、すなわち物語世界の外部にいる語り手によって語られているのである。しかし、『坊っちゃん』『場所』がすべて過去形で書かれていたら、ここまで論じてきたような効果はえられない（あるいは薄まる）であろうことを考えれば、この効果の一部は〈現在〉という特権的な時間に言及することによりえられるものであろう。その意味では、ジュネットの四例と

の間に相同性も認められる。

もう一点は、『坊っちゃん』と『場所』との間にみられる、ジュネットが「書記状況への指示<sup>(28)</sup>」と呼んだものの有無にかんする差異である。『坊っちゃん』においては、すでに引用した箇所にもみられる「清の事を話すのを忘れて居た」といった一節や、「其ほか一人々々に就てこんな事を書けば、いくらでもある<sup>(29)</sup>」といった一節により、自身が物語を語っている状況への言及がみられるのに対して、『場所』の語り手はただ自身が今置かれている状況（すなわち療養所における状況）に言及するのみで、いつてみれば自分が物語行為を行っているという自覚がみられない。このため、『坊っちゃん』においては語られる過去の出来事が現在の物語行為の動機になっていることが了解される（すなわち、過去の出来事と現在の物語行為とが因果関係で結ばれる）のに対して、『場所』の語り手はあくまでも自分が現在おかれている状況とその過去とが対比されるにとどまっているのである。

#### 四、結語にかえて

本稿ではここまで、「物語のディスクール」におけるジュネットの議論をなぞりながら、物語言説における多様な時間のあり方を概観してきた。そこから明らかなのは、物語言説は異なる時間に属する出来事を自由自在に配置することにより、つねに異なる時間を対比することができる言説の一ジャンルであり、またジュネットの時間論は物語におけるこのような時間のあり方を剔出したものであるということである。また本稿第三章では、『坊っちゃん』と『ぼくが電話をかけている場所』をとりあげ、語り手が物語行為を行っている時点が語り手の〈現在〉として特定されることによって引き起こされる効果について言及した。本稿での議論をまとめてふりかえるならば、これもまた異なる二つの時間、すなわち語り手にとつての〈現在〉と〈過去〉とを対比させる一つの方策であることは容易に理解されるだろう。

結語にかえてここでつけ加えておきたいのは、これらの時間の取り扱い方にみられる虚構性である。ジュネットも指摘しているように、『トリストラム・シャンディ』の独特の語りが明らかにするのは、それが物語を書くという行為であれ、口頭で話すという行為であれ、物語行為を行うには時間がかかるという事実である。これが無時間的に行われているかのように読者に錯覚させるの

は、まさに小説のフィクション的なメカニズムゆえのことである。「ぼくが電話をかけている場所」の語り手は、いかにして療養所のフロント・ポーチにしながらにして、読者に語ることができるのか。読者としては、その場における語り手の意識がわれわれの読書に供されうる物語として転写されていることについてコウルリッジのいうところの〈不信の停止〉を行わざるをえないのである。このような、虚構的なメカニズムとの関連において、物語の時間について論じることが今後の課題である。

## 註

- (1) Gérard Genette, *Discours du récit: essai de méthode*, in *Figures III* (Paris: Seuil, 1972).
- (2) 章題をはじめジュネットの用語は、一部をのぞき邦訳『物語のデイスクル』（花輪光・和泉涼一訳、水声社、一九八五年）における訳語にしたがったが、ジュネットからの引用は拙訳による。
- (3) 原題は「*Temps de la narration*」。邦訳では「語りの時間」となっているが、誤解を避けるため本稿では「物語行為の時間」とした。
- (4) *Ibid.*, p. 80. ジュネットが引用しているポール・マゾンによる仏訳をそのまま日本語に訳出した。
- (5) *Ibid.*, p. 81.
- (6) *Ibid.*
- (7) ジュネットがここで〈現在〉*maintenant*という語で指し示しているのは、当然ながら、物語が今まさに語っている時点のこと、すなわち、のちに定義される用語でいえば、第一次物語言説の語りの時点のことである。本稿第四章で考察する語り手にとつての〈現在〉、すなわち彼が物語行為を行っている時点とは異なる。本稿では前者を「語りの時点」と呼び、後者を「物語行為の時点」と呼ぶことにする。
- (8) *Ibid.*, p. 85
- (9) 「[断片の区切り方は] 非常におおざっぱなものであり、純粹に説明のためである」(*Ibid.*, p. 84.)
- (10) *Ibid.*, pp. 81-82. 強調は原文。
- (11) *Ibid.*, p. 82.

- (12) *Ibid.*, p. 81-82.
- (13) バルザック『グランド・ブルテシーシュ奇譚』宮下史朗訳、光文社古典新訳文庫、二〇〇九年、七一五五頁。
- (14) 同書、四四頁。
- (15) ここでロザリーの話を要約という形でメレ夫人の秘密を語る語り手は、全知の語り手のようにふるまっている。ロザリーがメレ夫人の屋敷にいたころに実際に見聞したことはともかく、そのときのメレ夫人あるいはその夫のメレ伯爵の心情（夕食のときに、彼は妻がずいぶんとめかし込んでいるのに気がついていて）（同書四五頁、傍点は河田）といった、当時のロザリーでさえ知りえなかったのではないかと思われることまでが語られている点は興味深い。一人称の語り手が全知の語り手のようにふるまう可能性については拙論「語り手」の概念をめぐって」（京都造形芸術大学紀要『GENESIS』第16号、二〇一三年）第五章も参照のこと。
- (16) 詳しくは前掲の拙論を参照。
- (17) Genette, *op. cit.*, pp. 229-233.
- (18) ジュネットによれば、「過去時制の使用は、物語行為の時点と物語内容の時点とを隔てる時間的距離こそ明らかにしないが、それだけでこれ（第一のタイプの語り）がそのようなものであることをじゅうぶんに示しているのである」(*Ibid.*, p. 232.)。
- (19) 夏目漱石『坊っちゃん』（『漱石全集』第二巻、岩波書店、一九九四年）二五三―二五四頁。
- (20) 同書、三九九―四〇〇頁。
- (21) これは、ジュネットが好んだ例でいえば、アベ・プレヴォー『マノン・レスコー』（一七三二）において騎士グリユウによる物語が、彼が十七歳であった時点まで遡り、マノンとの恋物語を経て、グリユウ自身の物語行為が始まる瞬間、すなわちおよそ二年ぶりに再会したルノンクール侯爵に宿屋《金の獅子》へと誘われ、そこで侯爵に促され物語りを始めた瞬間（の直前）に到達するのと同じである。
- (22) 参考までに記しておくと、『坊っちゃん』が初めて発表されたのは『ポトトギス』一九〇六年（明治三十九年）四月号であった。一方、『坊っちゃん』第十号では日露戦争のものとと思われる祝勝会の様子が描かれるが、現実の日露戦争

の終戦は前年九月五日（ポーツマス条約調印）であった。清の死は日露終戦の翌年の二月であるように書かれているから、当時の読者の多くは、この物語を清を亡くして間もない語り手〈おれ〉によるものとして読んだのではないだろうか。

- (23) 同書、二四九頁。この一節、あるいは作品末尾の一説にみられる現在形は、額面どおり、語り手の現在を指し示すものだが、この作品ではそうでない現在形も多用されている。

道中をしたら茶代をやるものと聞いて居た。茶代をやらないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所為だらう。〔……〕一番茶代をやつて驚かしてやらう。〔……〕汽車と汽船の切符代と雑費を差し引いて、まだ十四円程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰ふんだから構はない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて目を廻すに極つている。（同書、二六三頁）

傍点部分では過去のことながら正しく過去形で述べられているが、傍点部分は過去の〈おれ〉の思考・感情が述べられているにもかかわらず現在形が用いられている。これらの現在形の使用は、いわゆる歴史的現在の事例というよりはむしろ、過去の思考・感情を描くことに特化して利用されているものと思われる。このような意図的な時制の混同は『坊っちゃん』自身のテーマとあわせて論じると興味深い、紙幅の都合上ここではこれ以上深入りできない。

- (24) Raymond Carver, "Where I'm Calling from," in *Where I'm Calling from: Selected Stories*, Vintage, 1989, p. 278. 翻訳は、レイモンド・カーヴァー「はくが電話をかけている場所」(『Carver's Dozen レイモンド・カーヴァー傑作選』村上春樹編訳、中公文庫、一九九七年) によった。

- (25) Genette, *op. cit.*, p. 231. 『嫉妬』における過去形の使用の一例は次のようなものである。

A は、この地方でつくられる肘掛椅子のひとつの谷間の方を向いて腰

を下ろし、昨夜借りた小説を読んでいる。昼食の際に、彼らはすでにその小説について語り合った。(アラン・ロブ＝グリエ『嫉妬』白井浩司訳(『ロブ＝グリエ／ビュートル』集英社版世界の文学25、集英社、一九七七年) 七頁、傍点は河田)

- (26) これら四つのテクストは、原著が英語であるものも含めジュネットが引用しているもの (Genette, *op. cit.*, p. 232.) をフランス語から訳出した。強調はすべてジュネットによる。また、「最近まで……住んでいた」「最近……もらったところだ」といった近い過去を表す表現(文法的には前者は半過去で、後者は近接過去で表されている)にも、ジュネットは注意を喚起している。

フィールディング『トム・ジョウンズ』からの引用は、冒頭部とはいってもじつは第一巻第二章で、これに先だつ第一章においては、〈私〉を名乗り作者の声をもつ語り手がその創作観を披瀝している。この語り手については注27も参照。

これに対してバルザック『ゴリオ爺さん』の引用は、まさに作品の冒頭部分で、ここからしばらくの間、物語の舞台となる下宿屋(ヴォケー館)やそこに住む人々の様子が現在形で語られる。

バルザック『ウジェニー・グランデ』、フローベール『ボヴァリー夫人』は、いずれも作品結末部分からの引用で、ジュネットも注意を喚起しているように、後者では冒頭でも「われわれ」を名乗る語り手が現在形で語りを行っている。

- (27) ジュネットは従来の一人称／三人称の物語という呼称を嫌い、これらをそれぞれ等質物語世界的／異質物語世界的という用語で置きかえたが、『トム・ジョウンズ』『ゴリオ爺さん』『ボヴァリー夫人』の語り手のように、自身を一人称の代名詞で指し示しはするが物語の世界の外に身を置いて語りを行う語り手の存在こそが、まさにその理由であった。詳しくは前掲の拙論第一章を参照されたい。

- (28) 「そして、『トリストラム・シャンディ』における書記状況 [situation d'écriture] への指示でさえ、トリストラムによる(虚構の)行為を対象としたものであり、スターンによる(現実の)行為を対象としているのではない」(Genette, *op. cit.*, p. 226.)

- (29) 夏目、前掲書、二六七頁。傍点は筆者。



## On Narrative Time

### KAWADA Manabu

In his celebrated book, *The Narrative Discourse* (1972), Gérard Genette, often regarded as the founder of narratology, devotes three (out of five) chapters, namely “Order,” “Duration,” and “Frequency,” to the analysis of narrative time. Especially, the terms such as “anachrony,” “analepsis” and “prolepsis,” which Genette coined while discussing the narrative order, are still widely in use to describe the chronological aspects of narratives. Genette also returns to the issue of time in a small section entitled “Time of Narration,” included in the chapter “Voice,” where Genette examines the nature of the narrator. This paper aims to reexamine Genette’s long supported theory of narrative time, focusing on his analysis on the narrative order and the time of narration.

The first three chapters deal with Genette’s treatment of passages from *Aeneid* and *Jean Santeuil*. The comparison of the macro-level analysis (*Aeneid*) and the micro-level one (*Jean Santeuil*) shows one aspect of the narrative time; anachronies at macro levels embrace anachronies at smaller levels within them. However, this paper also points out that Genette’s notion of subjective/objective retrospection and the subsequent concept of chronological subordination are not adequate and require further sophistication.

The next chapter of this paper assesses Genette’s four categories of the time of narration: (1) posterior, (2) anterior, (3) simultaneous, and (4) intercalary. This chapter compares Soseki Natsume’s *Botchan* (1906), which apparently belongs to (1), with Raymond Carver’s short story “Where I’m Calling from,” which seem to be an example of (4), discussing the significance of “present” in narrative.